
テク×2 (テクテク)

沢崎翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テク×2（テクテク）

【Nコード】

N6115Y

【作者名】

沢崎翔

【あらすじ】

テクテクと、ただ歩く。

たったそれだけのことが、一生忘れられない思い出になる。

それが、100kmハイク。

これは100kmを歩く中で、様々なことを感じ、成長していく人たちの群像劇（になる予定）です。

感想など頂けたらうれしいです。

2011年11月19日(土) 14:00)

リアル100ハイ開始と同時に連載スタート↓「ボーイスカウト東京連盟」「100kmハイク」で検索。

1歩目：100ハイ×ペーゴマ

24時間以内に100kmを歩いたことのある人が、一体どれほどいるだろう。

：まあ、僕はあるけど。それも、2回。

100kmっていうと、マラソン2回分よりも長い。東京から熱海まで行けてしまうほどの距離だ。

それだけの距離を歩くものだから、ゴール付近になるともう、一歩踏み出すたびに足の骨が粉々に砕けるような激痛に襲われることなんか当たり前。

ゴールした後だって、その場で着の身着のまま眠り込んでしまう人や、痛そうな顔をしながら足にできたマメを潰す人もザラにいる。

休憩所に広がるその光景は、まさに戦場の野営病院を彷彿させるほど凄惨なものだ。

それだけのダメージを体に与えるほど過酷なイベントだから、当然後遺症もひどい。

完歩から一週間以上経っても杖なしでは歩けない人や、中には足を疲労骨折してしまう人もいる。

幸い僕はそこまでひどい後遺症に悩まされたことはないんだけど、たまに長時間立ち続けていたりすると、左足首の外側が痛くなってくることもある。たぶんそれも、後遺症の1つだと思う。

じゃあ、一体何のために？

完歩したら100万円がもらえるとか、テレビで取り上げられて有名人と会えるなんていうおいしい要素なんか一切ないのに。

そんなに辛い思いをしてまで、一体僕は、何のために100kmも歩くのだろう？

…わかんない。何でだろう？

いや、特に深い理由なんかないんだよ、きっと。

だって、嫌だろうがなんだろうが、歩かなくちゃいけないんだもん。

それが、100kmハイク。

都のボーイスカウト連盟が毎年11月に開催している、かなり狂ったイベントだ。

だって24時間で100kmも歩くんだよ？もちろん、寝ないで。

「狂歩」と書いて、「100ハイ」と読みます。…なんてね。

さて、少し話が脱線してしまったけど、そもそもそんな面倒くさくて辛いイベントに、何で僕は参加しなくちゃいけないのか？

実はそれは、僕が大学で入っている部活と関係がある。

それが、ローバークルー部。

ちよつと変わった名前の部活だけど、要するに「ローバークルー」っていうのは、ボーイスカウトの大学生バージョンだと思ってくれたらいい。

そんな聞き慣れない名前の部活に興味本位でなんとなく入ってしまったのが、運の尽きだった。

実はこの部活、都のボーイスカウト連盟に加盟している。

だから当然、連盟が主催する100kmハイクには、加盟団体の一員として参加しなくちゃいけないのだ。

ああ、2年前、かわいい女の先輩たちに唆されて入部届にはんこを押してしまった自分を殴り飛ばしてやりたい！

…まあ、今さらそんなこと言っちゃって仕方がないんだけど。

とにかく、早くこのアンケートを埋めなきゃ。

そう、申し遅れましたが僕ことなかいたけひろ中井雄浩は今、今年で3回目を迎える100kmハイク——通称100ハイに関するアンケート用紙を前に、もう1時間近くも無駄にうだうだ考え込んでしまっているのだ。

「目指せ、100ハイマジック！あなたがラブを咲かせたい人はだ〜れ？ぜひ×2指名してちょ♪（も・ち・ろ・ん、「さきこ」って書いても大歓迎だよん？）」

…イタい。イタいよ、咲恋^{さきこ}。

名前もイタいけど、この質問のテンションはもはや読むに堪えないよ。

「恋が咲く」という名前を付けられてしまったばかりに、「わたし、今まで恋なんか咲いたことないもん！」と開き直ってみんなから憐^{もりのさ}みに満ちた失笑を誘うのを得意とするのが、僕の同期である森野咲^{さきこ}恋という女の子だ。

そんな彼女だけど、今回の100ハイでは部活の代表者として、連盟の人たちといろいろやり取りをしている。

更に彼女は今回の100ハイで、誰もがうらやむ「ある権利」を握っている。

それはローバー部員なら、一度は乱用…いやいや、願わくば使わせて頂きたいなあと思うもの。

…100ハイで一緒に歩く、男女ペアを決める権利だ。

そう。100ハイは原則的に、男女2人ペアで歩く。

真夜中に人気のない田舎道を歩くこともあるから、安全上の問題のため、夜間に女の子が1人だけで歩くことが認められていないのだ。

だから女の子が歩く時は、必ず男とペアになって、一緒に歩かないといけないというルールになっている。

：これで何かが起こらないわけがないじゃないか！

実際、僕の1学年上に当たる女の先輩なんかは、2年前の100ハイが終わってからしばらく経った後、ペアを組んでいた男の先輩と別の意味でゴールインしてしまった。本当にうらやましい限りだ。

生まれてこの方、女の子とデートしたことさえない僕としては、100キロを歩くだけで彼女できるんだったら、足の1本や2本くらい、全然潰したって構わないと思う。

それに付き合うには至らないまでも、100ハイの前よりもずっと仲良くなるという男女ペアはけっこう多い。

やっぱり、100キロを24時間以内に歩くという極限状態の中では、普段はだらしがなくていい加減な男だってどこか頼もしげに見えるし、いつもはうるさくて小憎らしい女の子でさえ、不思議とかわいく見えてしまうものなのかも知れない。

そしてそういった数々の現象を、人は俗に「100ハイマジック」と呼ぶ。

結局、それが目当てで100ハイに参加するという人も少なくないんじゃないかと、僕は思っている。

ていうか、そうでなければ僕たちは、ただ頭が狂っているだけのDM集団だ。

そんなわけで僕は今、今年の100ハイのペアを決めるかも知れないこのふざけたテンションのアンケートに、ある女の子の名前を書こうかどうか、真剣に悩んでいる。

シャーペンを置き、頬杖を突きながら窓の外の景色をぼんやり眺める。

10月の常盤松大学ときわまつだいがくのキャンパスは、2週間後に迫った大学祭の準備に追われる学生たちの姿で賑わっている。

僕が今座っている所からは、お揃いのパーカーを着た何人かの集団がダンスの練習をしている光景が見て取れた。

みんなしてベーゴマのように、忙しそうにくるくると回り続けている。

一体あの人たちは、何が楽しくてあんなにぐるぐる回っているんだろう。

まあ、そんなことを考えたって仕方がないか。

あの人たちからすれば、僕が1ヶ月後に100kmを歩こうとしていることだって、意味がわからないことだと言い出すに決まっている。

でも、今回の100ハイは、僕にとって特別な意味を持つ。

——「今年の100ハイ、一緒に歩いて下さい」

そう言った彼女の言葉が、さっきから頭の中で何度もリフレインしている。

本気で言ったんだろうか。でも、もうかなり前の話だもんなあ。

…そうだよ、忘れているに決まっている。

何期待しちゃってんの？

止めときなよ。どうせ、またイタイ思いをするだけなんだからさ。

過去のトラウマが、僕の右手にその子の名前を書くことを躊躇させる。

でも…。

もし彼女があ那时的約束を覚えてくれていて、このアンケート用紙の同じ項目に、僕の名前を書いてくれたとしたら…。

ため息をついてから、再びシャーペンを手取る。

書こう。…いや、やっぱり無理。さっきから、そんな堂々巡りの繰り返し。

本当に情けない。結局僕は、いつもこうだ。

2回も完歩したくせに、いざ恋愛となると、最初の一步さえ踏み出すことができない臆病者なんだ。

はあ、君のアンケートを見ることができたらなあ。

…ねえ。

君は本当に、僕の名前をちゃんとここに書いてくれたのかな？

…
かなで
奏
ち
ゃ
ん。
。

1歩目：100ハイ×ベীগマ（後書き）

はじめまして、【1歩目】を読んで頂き、ありがとうございます。

さて、物語中に登場する「100ハイ」は、実在しているイベントです。

そしてこの話は、僕が実際に100ハイに参加した経験をもとに書いています。

だから「足を疲労骨折するなんて、そんなバカな」と思っている方。事実です。

ウソだと思ったら、100km歩いてみて下さい。

…冗談です。

さて、この物語の主人公の1人である中井さんが100kmの道を歩き出すのはもう少し先の話になりますが、どうかその日が来るまで、読み続けて頂けたら嬉しいです。

2 歩目：豚×クラT（前書き）

【2 歩目：豚×クラT】

2 歩目：豚×クラT

あおきかなで
青木奏ちゃんとは僕と同じ部活で1つ下の後輩に当たる、ちょっと変わった女の子だ。

「豚を食べに来ました。ここ数日、もやししか食べてなかったんで
そう言って、彼女は何の前触れもなく、ひょうひょうとした様子
で現れた。

その日は地域の大学生ローバーが何人か集まって、幼稚園くらいの
ボーイスカウトのこどもたちに、豚の丸焼きを振る舞うというイ
ベントの日だった。

常盤松大ローバーからは役員である僕と咲恋、それに2年生の松
やまざき
山哲が参加することになっていたんだけど、まさか奏ちゃんが来る
なんて。

そんな話全然聞いていなかったから、僕はすっかり面食らってし
まった。

「ありがとう、奏ちゃん！来てくれて」

そう言って、咲恋がはしゃいだ様子で話しかける。

「ねえ、聞いてよ、奏ちゃん。他大の子がメールでさ、『オレ、今
日バイト入ってたの忘れてたわ』：お前、ふざけんなよ、ジーザス
！って感じでさ。ちょうど困ってたところだったんだよね」

「マジですか？ よっしゃ、豚が1人分浮いたぜ」

そう言って、奏ちゃんが小さくガッツポーズを取る。

ああ、この子、絶対に何か勘違いをしている。食べるだけじゃないんだよ？ 僕たちが焼くんだよ？ 豚を。ちゃんと働いてくれるのか、なんだか心配になってきた。

やっぱり、彼女はどこか変だ。何かがみんなとずれているようにしか思えない。

女の子なのに、しゃべり方はどこか男っぽいし、おしゃれにも全然無頓着なようだ。

最近は暑いからって、上はダボダボのTシャツのヘビロテ。しかも今日は、よりによって高校時代のクラスTシャツの日かよ。もう何回見たことか。ドクロのマークが背中に描かれた、紫のクラT。

そんな格好で、平気な顔して新宿や渋谷の街中を出歩くんだもん。恥ずかしくないのかなあ。今日だって、他大の人たちもたくさんいるのに。

こんな感じで、化粧品を買うくらいなら一週間豪勢に肉を食べ続けるって言い切るのが、青木奏という女の子…って、あれ？

おかしいなあ。女の子っぽい要素が、1つもないぞ？

「ねっ？ 見てよ、こどもたち。たくさんいるでしょ？ みんなかわいいよねー」

「えっ、こんなにいるんですか？参ったなー、わたし、こども嫌いなのに」

性別不詳な奏ちゃんが頭を掻きながら面倒くさそうに言う姿を、遠目から見つめる。

…ああ、あった。女の子っぽい要素。

長い髪。しかも、墨をこぼしたみたいに黒くてきれいなストレートヘア。

それとコントラストを描いて際立つ、白くて透き通った肌。

そしてどこか醒めた印象を抱かせる、切れ長の目。

「まあ、豚だけ食べて、さっさと帰ればいいか」

がくっ。せっかく人並み外れてかわいく生まれてきたのに、中身の方はもっと人並み外れているからなあ。

彼女が普段何を考えているのか、本当によくわからない。

そんな彼女のことを「火星人」と呼んで煙に巻く人も少なくないけど、僕は嫌いじゃない。

むしろ、うらやましいとさえ思ってしまう。

彼女は、ちゃんと自分を持っている。

常にふらふらしながら生きている、僕とは違う。

僕も彼女みたいに、堂々と自分をさらけ出すことができたらなあ。

…いや、でも、さすがにクラTを着る勇氣はないな。

まあ、落ち込んでいても仕方がない。時間になって、メガネをかけた男の人が集合をかける。どうやら、彼が今日のイベントの責任者らしい。

いくつくらいだろう、少なくとも、大学生のようには見えない。

集まった大学生スタッフにいろいろ指示を出すんだけど、その異様に高い声が耳にまとわりついて、かなりうっとおしい。

しかも妙に馴れ馴れしくせに、言っていることがイマイチよくわかんないし。本当に大丈夫なの、この人？

それでも、豚を焼く台座を組み立てる手際の良さは、お見事と言うしかないかった。

難しいのに、炭に火を点けるのだって、3分もかからなかった。どうやら、彼のボーイスカウトとしてのスキルは、本物のようだ。

「すごいでしょー？あの人、夏目^{なつめ}さんって言うんだけど、間瀬^{ませ}田大^だ学^{がく}ローバーのOBさんで、今はプロのスカウトをやってるんだって」

「…で？今はどんな仕事をしてるって？」

「えっ？だから、プロのボーイスカウトだってば」

「ねーよ、そんな職業！」

要するに、ただのニートじゃん。やっぱりヤバいな、あの人。あ
あいう大人にだけは、なりたくないな。

2 歩目：豚×クラT（後書き）

ローバークルーはボーイスカウトの大学生版ということで、こういった活動も行っていました。

他にも地域のこどもを連れてハイキングをしたり、餅つきをしたこともあります。

3歩目：火星入×しゃくれアゴ星人

さて、順調に焼き始めた豚だけど、実はここから先が長い。

炭の遠赤効果でじっくり炙るものだから、夏目さん曰く、焼き上がるのに5時間近くもかかるそう。

うわー、みんなお腹を空かせて帰っちゃうよ。僕も帰りたいけど。

そうさせないために、今からおにぎりを作る班と、こどもたちと遊ぶ班に分かれるという。

どっちの班がいいか、手を挙げて選んで欲しいと夏目さんが説明する。

その結果、僕たち常盤松大ローバーの4人は咲恋以外、みんなおにぎりを作る班を選んだ。みんな小さいこどもが嫌いだから。

ははっ、僕たち、一体何をしにここに来たんだろうね？

ええ、そうですよ。僕も松山も、じゃんけんに負けたせいでこんな雑用をさせられているのだ。

そうでもなければ、誰が貴重な休日を犠牲にしてまで好き好んでこんな所に……って、奏ちゃんはそのクチだったか。

「中井さん。知ってますか？豚の脳みそって、中国では珍味として重宝されているんですよ」

ご飯をよそいながら、奏ちゃんがそんな豆知識を披露する。なぜか彼女は、こういうマニアックな方面に異様に詳しくたりする。

「しかも『豚の脳みそスープ』っていうのがあって、写真を見たんですけど、もうそのまんま、豚の脳みそがスープの上にプカプカ浮いてて…」

「きめーよ、お前、いつもそんなもの食ってんのかよ？」

気持ちよさそうに話す奏ちゃんの言葉を、松山がすかさず遮る。

この2人、同じ学年なんだけど、いつも何かにつけて言い合っている。

そりゃあもう、「ケンカするほど仲がいい」なんてレベルじゃない。たぶん、本当に仲が悪いんだと思う。

「食ってねーし、基本毎日もやしだし」

「ウソつけ！お前、どうせまた貧乏の振りをして同情引こうとしてるだけだろうが！」

「うるさい。黙れ、しゃくれアゴ星人」

「だーれがしゃくれアゴ星人だあ！」

また始まった。みんなが見ているのに、恥ずかしいなあ、もう。

でも松山のアゴはよく見ると、確かに少しだけしゃくれている。

そして文字通り、かなりしゃくに障る男だ。

とは言っても、社交的で行動力がある松山に対して、僕が一方的に妬んでいるだけだ。

そう。僕は松山が苦手だ。

自分とは対極的な存在っていうのもそうだけど、何よりも僕は彼に、これ以上ない弱みを握られている。

「…あつ、思い出した」

握ったおにぎりを皿の上に置いてから、奏ちゃんがぼそりと呟く。

それにしても彼女が作ったおにぎり、野球ボールくらいの大きさなんだけど、あのこどもたちにはちよつと大きすぎるんじゃないのかなあ。

「あの牛乳瓶メガネの人、去年の100ハイでラジオ体操をやった人だ。ですよね？中井さん」

「えっ、夏目さんのこと？…さあ、覚えてないけど」

「いや、間違いないです。あの人、かなり変わってますよね。ヤバいな、わたしとキャラが被る」

「安心しろ。お前以上の変人なんかいないから」

「『プカ×2（プカプカ）』のアゴほどじゃないよ」

「何だと、てめえ、コラ！もういつぺん言ってみろ！」

もう、ケンカしてる暇なんかあったら、もっと手を動かしてよ。

ところで「プカ×2」というのは、奏ちゃんが松山に付けたあだ名だ。いつもタバコを「プカプカ」ふかしているから、そう呼ぶことに決めたらしい。

表記が「プカプカ」じゃなくて「プカ×2」なのは、「記号や数字が混じっている方が火星語っぽい」という彼女のポリシーがあるから。よくわかんないけど。

こんな具合で、彼女はいろんな人の特徴をもじっては「ゝ×2」と呼んでいる。

まあ、僕は普通に「中井さん」だけどね。要するに、それだけ無個性ってことか。うーん…。

4歩目：苦行×夢

それにしても、100ハイか。正直に言って、あんまりいい思い出はないなあ。

過去2回、100ハイに参加して、僕は2回とも完歩することができた。

でも、ちっとも楽しくなかった。

100ハイのペアは役員が決めるから、必ずしも気心が知れた人と一緒に歩けるとは限らない。時には男女比の関係で、3人で歩かなきゃいけないことだってある。

そんな組に入れられた日には悲惨だ。2人だけで会話が盛り上がって、あぶれた1人は寂しく地図を読みながら歩く。

僕は過去2回とも、そんな惨めなガイド役を強いられてきた。

だから100ハイマジックなんて、夢のまた夢。

僕にとって100ハイは、ただの苦行に過ぎなかった。

本当は僕だって、女の子と2人きりで歩いてみたい。

いろんな話をして、いろんな景色を見て、せめてその100kmの間だけでも、本当の恋人どうしになったみたいに、甘い時間の中を歩いてみたい。

でも、絶対に無理だよ。

僕みたいなやつと一緒に歩いてくれる女の子なんか、いるわけがない。

いるとしたらあの子だけど、そのチャンスはもう、3ヶ月前に自らの愚行で潰してしまった。

本当に僕は、どうしようもないダメ男だ。

「…だから！あれは咲恋さんのせいだったんだって！」

まだ言い合っているよ。

実はこの2人、去年の100ハイではいずれも途中リタイアという結果に終わっている。だからそんなことで責め合ったって、虚しいだけだと思うんだけどなあ。

「咲恋さんが道に迷ったりするから！体力的にはまだ余裕だったのに、そのせいで足切りになったただけだっつーの！」

「うわー、人のせいにするなんて、しゃくれアゴの風上にも置けないやつだな、お前は」

「いいよ、置かなくても！」

「まあ、わたしは今年こそ、絶対に完歩するけどね」

「いいや、絶対に無理だね」

強い調子で、松山が言う。

「だってお前、全然地図読めねーじゃん」

「いいんだよ。そんなの別に、合理的にM&A方式で補っちゃえば」

M&Aなんて、奏ちゃんはまた小難しい言葉を使う。

要するに、地図が読める人とペアを組んで、その人について歩くっていうことかな。確かに、一番合理的で楽な方法だと思う。

「そういうわけで、中井さん」

えっ、どういうわけ？いきなり話題を振られて戸惑いつつも、奏ちゃんの方を見る。

「豚の脳みそは譲りますから、それで1つ、わたしに買収されてくれませんか？」

「はぁ、買収？」

「今年の100ハイ、一緒に歩いて下さい。中井さん、地図を読むのは得意ですよね？」

その言葉は、僕の耳に3周遅れで入ってきた。

「…うん。いいよ」

「よしっ、交渉成立」

短く言ってから、彼女は再びおにぎり作りに精を出し始めた。

心なしか、野球ボールサイズだったはずのおにぎりが、砲丸サイズまで大きくなっているような気がする。

そんな彼女の様子を、僕はおにぎりを握ることも忘れながら、しばらく呆然と見つめるしかなかった。

今僕、100ハイに誘われた？

女の子から、サシで…？

そんなこと、もちろん今まで一度もなかった。

どうせ今年も適当な人と組まされて、ガイド役をさせられるものだ**とばかり**思っていた。

僕と2人きりで歩いてくれる女の子なんか、いない**とばかり**思っていた。

それなのに、こんな僕でも、「必要だ」と言ってくれる女の子がいるなんて。

100ハイマジック、か。

「みんなー！おにぎり足りないよー！ほら、もっと頑張っ**て！**」

部屋に入ってくるなり、夏目さんが僕たちおにぎり班を急き立てる。

「中井くんも、作ったおにぎりはここに置いて」

夏目さんに言われるがままに、ぼんやりしながら三角形になり損ねたおにぎりを銀皿の上に置く。

…こんな僕だけど。

100ハイなんか、苦行でしかないって思ってた僕だけど。

今回ばかりは、ちょっとくらい、夢を見たっていいよね？

4 歩目：苦行×夢（後書き）

以上、中井さんと奏が100ハイで一緒に歩く約束をするエピソードでした。

100ハイですつと寂しい思いをしてきた中井さんにとって、奏の誘いは夢みたいにうれしいことなんです。

次回より、10月の話に戻ります。

5 歩目：書く×書かない

窓の外には、相も変わらずぐるぐる回り続けるベーゴマ集団の姿が見受けられる。

すごいなあ。まあ回すだけなら、僕だって負けてないけど。持っていたシャーペンを机の上に放り投げ、うつ伏せになる。

書く。書かない。

もう一時間以上も、そんな不毛な悩みを頭の中でぐるぐる回し続けている。

何でだよ？ちゃんと約束したじゃないか。もっと自信を持てよ！

そう思って右手に力を入れるたびに、「もし、彼女があの時の約束を忘れていたら…」という不安が、僕の右手に繋がるあらゆる神経を切り裂き、動かなくしてしまうのだ。

そう。僕はひたすら、そのことだけを恐れていた。

あの日以降、本当は何度も本人に確認しようと思ったんだ。

「あの時言ったことは本気なの？」 「本当に、一緒に歩いてくれるの？」 って。

でも、訊けなかった。

そんなことを訊いて、「えっ、何の話ですか？」なんて言われる

ことを想像しただけでもう、1人で勝手に舞い上がっていた自分が恥ずかし過ぎて、頭がおかしくなってしまうそうだった。

だって、冷静に考えてみてよ。

彼女は別に、僕と歩きたいわけじゃない。

地図を読む人だったら、誰でもいいんだ。

あの時彼女が僕を誘ってくれたのは、100ハイの話題になって、たまたまそこに、地図を読む僕がいたから。

そうだよ。そんなにうまい話なんか、あるわけないじゃないか。

4限の終わりを告げるチャイムが鳴る。

そろそろこのロビーも、教室から出て行く人たちの群れであふれ返ってくるだろう。そこに飲み込まれるのは、なんとなく嫌だ。その前に、帰っちゃえ。

アンケートの締め切りは今日中だけど、もうどうでもいいや。

そもそも、この項目に特定の人物名を書く人なんか、まずいないって。恥ずかしいもん。空欄のまま、さっさと提出しちゃおうっと。

「…って。僕は一体、どこまでヘタレなんだよ」

「うん、そうだね」

いや、そこは少しくらいフォローしてくれても…って、あれ？

何で独り言に対して、返事が返って来るの？

はっとして声がした方に顔を上げる。

その瞬間、僕はまた顔を伏せたくなるような残念な気分にならず
なっちゃったんだけど、それはさすがに失礼だと思ったから、何と
か持ち堪えた。

「何してんの？ 咲…」

「あー！これ、100ハイのアンケートじゃん！」

そう言って咲恋が、僕の目の前に置いてあったアンケート用紙を
ぱっとり上げる。

しまった、油断していた！

慌てて取り返そうとするけど、咲恋は器用に体をくねらせてそれ
を許さない。くそっ、丸っこい体のくせに、意外と素早い。

「…何よー、中井さん、肝心なところがまだ書いてないじゃん。締
め切りは今日なんだよ？早くしてもらわないと、困りますなあ」

例の空欄を指しながら、咲恋がふくれっ面で文句を言う。

うぜー、こいつ、今授業が終わったところか。

何て運が悪いんだ。よりによって、アンケートを作った張本人に
捕まってしまうなんて。

「：別に。空欄でいいんだよ、そこは」

咲恋から目を逸らしながら、ぶっきらぼうに言う。

「全然よくないよ。ペアを決める立場としては、この欄が一番重要なんだからさー」

そう言いながら、咲恋が隣のイスにさつと腰掛ける。

6 歩目：オブラート×ピエロ

「ねえ、誰と一緒に歩きたいのさ？ やっぱり、1年生？」

「いや僕、1年生の女の子と、あんまり話したことないし：」

「何さー。そんなこと言ったら、2年生の女の子とだってあまり話せてないじゃん」

グサツ……。こいつ、オブラートという言葉を知らないのだろうか。いや、知るわけがないか、咲恋だもんね。

でも確かに、男子高出身のせいか、僕は女の子に対して全くと言っていいほど免疫がない。

咲恋みたいな同期の女の子にはだいぶ慣れたけど、先輩や後輩となると、からきしダメだ。

「ていうか、本当に誰でもいいんだって！ どうせ僕みたいな男に、選ぶ権利なんかないわけだし。それに、どうせみんな何も書いていないんでしょ？ いるわけがないじゃん。こんな所に、特定の人の名前を書くなんて：」

「いるよー、何人かは。まっちゃんとか、奏ちゃんとか」

「えっ、奏ちゃんが！」

言ってから「しまった！」と思ったけど、もう遅かった。

「…なるほどー、中井さん。そういうことですかあ」

僕の肩をポンポンと叩きながら、咲恋がそう言って満面の笑みを見せる。

面倒くせー、こういった類の話になると、咲恋はいつにも増してうざくなる。

「そっか、奏ちゃんがいいのかあ。うーん、でもなー。彼女の気持ちもあるしなあ…」

そう言って頬杖をつきながら悩み始める咲恋だけど、どうせレンコンみたいにかすかな頭なんだ、何を考えたって結論なんか出てくるわけがない。

それにしても、咲恋の反応…。

アンケートの作成者だから、咲恋は当然、みんなから集めたアンケートを見ているはずだ。

もちろん、奏ちゃんのも。

その咲恋が見せる、この反応。

「…誰なの？奏ちゃんを書いた人の名前って」

そう呟く声が、思わず震える。

「知ってるんでしょ？教えてよ」

やっぱり奏ちゃんは、僕の名前を書いてくれなかったみたいだ。

しかも、「彼女の気持ちもある」って…。

それって要するに、他の人の名前が書かれていたってこと？

だとしたら、僕は完全にピエロじゃないか。ははっ、やっぱりこ
うなるわけか。

早まらなくてよかった。今年も、つまらない100ハイになりそ
うだ。

「いやー、さすがにそれは、プライバシーの保護と言いますか…」

「知らないよ。こんな部活に、プライバシーもクソもないよ」

「ぶっちゃけるねー、中井さん」

「だから、早く教えて」

「まあ、そこまで言うんだったら、教えてあげてもいいけど…」

そう言いつつも、咲恋の様子はどこか煮え切らない。

「うーん、でもなあ。言っても、あんまり意味ないと思うよ?」

「いいから、早く教えてよ」

イライラしながら、咲恋を急かす。

もちろん、僕がそんなことを知ったところで、今さらどうしようもないというのはわかっている。

でも、そうでもしないと、とてもじゃないけどこのもやもやした気持ちに整理をつけられそうにない。

「じゃあ、言うよ？」

ふて腐れたような顔をしながら、咲恋が言う。

思った通り、ロビーがだんだん騒がしくなってきた。

聞き逃さないように、咲恋の方に耳を向けながら、息を飲むようにして次の言葉を待つ。

「∴『テク×2（テクテク）』」

「∴はい？」

「だから、『テク×2』。それが、奏ちゃんがこの空欄に書いた人の名前だよ」

そう言って、咲恋が口を尖らせる。∴いやいや、ちょっと待って。

何だよ、「テク×2」って。

彼女の火星語でそんな風に呼ばれる人、今のローバーにいたっけ？

7 歩目：宿題×迷路

「誰だよ、『テク×2』って？」

「知らない。だから言ったじゃん、『言っても意味ないよ』って」

「でもそう書いてあるってことは、ローバーの中に『テク×2』って呼ばれてる人がいて、奏ちゃんはその人と一緒に歩きたいってことだろう？」

「そうだろうけどさー。でも、仕方ないじゃん。わたし『テク×2』って誰のことを言ってるのか、さっぱりわからないもん。ぶっちゃけ、すごく困ってるんだよねー。あの子、一体誰と組ませて欲しいんだろう？」

お手上げといった様子で、咲恋が首を傾げる。

やっぱり、咲恋も知らないのか。となると、現時点で「テク×2」と呼ばれている人はいないと考えてよさそうだ。

だとしたら「テク×2」は、まだ火星語で呼ばれていない人のうちの誰かってこと？

「まあ100ハイのペアだから、女の子ってことはないよねー」

「あと、既に火星語の名前が付けられている男も、候補から外れるよね」

「なるほどー。だったらもう、中井さんでいいか」

「ちょっ、何でそうなる？」

「いいじゃん。中井さん、まだ火星語の名前がないんでしょ？」

「まあ、そうだけど…」

「だったら、なっちゃんえよ、ユー。彼女が望む、『テク×2』さん
ってやつにさ」

「えっ？ 僕が…」

「テク×2」に…なる？

それは考えもしない発想だった。でも、こういうことは考えられないだろうか。

もしかしたら奏ちゃんは、特定の人物を意識して「テク×2」と書いたわけじゃないかも知れない。

今回、一緒に100kmを歩く相手に、「テク×2」になって欲しいんじゃないだろうか。

だったら、僕が「テク×2」になってしまえばいい。

それはなんだか、僕が彼女にとって、特別な人間になることのように思えた。

「まあ、奏ちゃんのことだから、適当に書いただけっていう可能性もなきにしもあらずって感じだけど…」

腑に落ちない様子で呟く咲恋の隣で、僕はすっかり舞い上がっていた。

僕が「テク×2」になるってことはイコール、奏ちゃんの彼氏になるってことでいいのかな？ いいなあ、それ。

奏ちゃんはちょっと変わっている子だけど、その辺の女の子よりは桁違いにかわいいし、付き合うことになったら、すごく楽しそうだ。

「咲恋。『テク×2』って、一体どういう人のことを言ってるんだろうね？」

「知らないよー。それくらい、自分で考えなさい。まさに『ラブの宿題』ってやつ？ いいなー、うらやましい」

そう言って、咲恋が立ち上がる。

「じゃあ、わたしそろそろ行くね。頑張るんだよ、中井さん。ぶっちゃけわたし、ずっと心配してたんだから。だって中井さん、しーちゃんとあんなことになってから、ずっと…」

「…咲恋！」

自分でもびっくりするくらい的大声が、突然口から飛び出した。

でもそうなってしまふほど、しーちゃん——おおやましほ大山紫穂ちゃんの名前は、僕にとって耳に痛すぎる名前だ。

「…その話はもう、忘れたいんだよ」

やっこの思いで言葉を吐き出す。

そうか、あれからまだ、半年しか経っていないんだよな。

バカだなあ、僕は。また同じ失敗を繰り返そうとしていたなんて。

しーちゃんをあんな目に遭わせてしまった時、身が焼けるほど後悔したばかりじゃないか！

僕みたいな男が誰かを好きになるなんて、それはもう犯罪行為に等しいんだ。

だからもう、誰かを好きになるのは止めようって。

「忘れるなんて、そんなのズルすぎるよ」

呆れた風に言い捨ててから、咲恋は講義棟の外に出て行った。ふと外を見ると、例のベーゴマ集団も練習を止めて、そそくさと帰る準備を始めていた。

そんな中で僕だけが、永久に抜け出せない迷路の中を、ただ闇雲に、ぐるぐるぐるぐる、回り続けている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6115y/>

テク×2（テクテク）

2011年11月30日14時54分発行